



ニッポン 臨終区巻

ドクター和の

2025年開催予定の「大阪・

関西万博」を疑問視する声が目に見え、ちっとも嬉しくないですよ。海外パビリオンの用途が立たぬまま予算は膨らむ一方。それでも、「国家事業だから」と血税を注ぎ込む。失敗を予測しつつ一度決めたら戻れない……この国の政治家は、先の大戦からも、コロナ禍からも何も学んではいないようです。

太陽の塔をシンボルにした、1970年の大阪万博は、こんな場当たり的なものではありませんでした。政治家でも広告代理店でもない知識人たちが「万国博を考える会」を自主的に結成し、企画を練り上げ、徹底的に予算を管理。大収益を生んだのです。この「万国博を考える会」の中心に、この人がいました。

326

社会学者 加藤秀俊

長尾和宏（ながお・かずひろ）医学博士。公益財団法人日本尊厳死協会副理事長としてリビング・ウィルの啓発を行う。映画『痛くない死に方』『けったいな町医者』をはじめ出版や配信などさまざまなメディアで長年の町医者経験を活かした医療情報を発信する傍ら、ときどき音楽ライブも。

『中間文化論』などで知られる社会学者で評論家の加藤秀俊さん。9月20日、都内の病院で亡くなりました。享年93。詳しい死因は明らかにならず、ただ病気のため「死亡」との発表。当連載を長年続けていますが、新しいやり方だと思えました。病の詳細を公表する義務など誰にもないのです。教



えたくなければ、それでよし。幅広いジャンルで多くの著作を出し続けた加藤さんですが、先立たれた妻との人生を書いた『九十歳のラブレター』（2021年、新潮社）は、既婚高齢男性にぜひ読んでほしい一冊です。

加藤さんと妻・隆江さんは、小学校の同級生。戦争の混乱の中、青春時代に運命の再会を果たし、加藤さんは隆江さんに思いを寄せ続けました。「いまの言葉で言うところ、ストーリーだった」と振り返るほどに。念願かない彼女のハート射止め、23歳で結婚。隆江さんは夫の人生を、太陽のように明

るく照らし続けていたようです。それから65年。別れは突然訪れました。

加藤さんがいつものように朝食を用意し隆江さんを起こしに行くところ、冷たくなっていたそうです。2019年9月のことでした。

ご夫婦は生前、二人が初めて出会った港区青山の小学校のすぐ近く、桜の木の下にお墓を購入して書きました。加藤さんは、こんなことを書いています。

〈あなたはいま、そこにいます。生まれ育った青山である。（中略）ぼくたちの墓石のうえには春になれば桜の花が満開で、散るはなびらがさやさとそそいでくるだろう。母校の校章も桜だった。ふたりそろって母校の学区内、入学のときからいっしょ、死んだあともおなじところにいっしょ、こんなしあわせがあつていいものだろうか〉

同級生で、親友で、同志でもあったおふたり。加藤さんは今頃、隆江さんと再再会を果たし『九十歳のラブレター』を、照れながら渡していることでしょうか。

亡き妻へのラブレター

